

# 真 生

第七卷 第三號



□人の一生はやるも一生ならばやらぬも一生である。然ば私共の一生は之からどうして暮すのが眞の一生であるでらうか。

□世の中には生れてから死ぬるまで、殆どなすこともなく一生を徒費して、恥ないものがある。乍然かゝる人々は本来自己の生存を自ら無視するものではあるまいか。

□否、少くとも、それらの人は確に自らを毒殺するものだと言はねばならぬ。而て、凡そ此の世に於て、これらの人々ほど此の世に無意義なものはない。世に所謂睡生夢死とは即ちこれらの人々を云ふのである。

□然ば人生の一生は、凡そ何かをか爲すべきであるか、即ち人生の意義とは何であらうか。そこには價値の生活が欲しいではないか。たゞ何かを爲すと云ふだけでは、それでは何等の意義もない。

□だから友よ、私達はいつも眞實に生きねばならぬ。いつも一生を通じ、永遠を通じ、人と生れた人生の生き涯いを私たちは爲さねばならぬ。而て、其の生き涯いとは、私はそれに答へて全心の活動と云ふ。

□全心の活動とは自己の本心に従つて全一人となることである。全一人となる事とは即ち自分の良心の命するがま、に全人類の幸福を中心として、献身の活動を爲すことである。

□友よ、人の一生はやつても一生、やらぬでも一生だ。（念）



# 信は敬なり

## 目次

信とは敬なり	尅子
盲の阿那律	土屋觀道
二月の出来事	土屋觀道
私の精進	鷲津太一
吾朋便り	

▽どんなに欲の深い人でも寝てゐる時は自分の金のことも忘れ大事の妻の顔も忘れ、子のことも忘れ、自分の鼻の半分缺けてゐることも忘れてゐます。

▽乞食も乞食であることを忘れ、王侯も王侯であることを忘れてゐます。たゞスヤ／＼と寝てゐる。自分で「寝てゐる自分」も忘れ、その忘れてゐる自分が又寝てゐることも忘れてたゞ「寝てゐる事實」のみであります。

▽寝てゐる儘が生きてゐるのも、死んでゐるのも一切忘れてたゞ寝て居ります。全く一味平等一心の世界であります。斯うした「睡り」が人間に與へられてゐることは、而かも人世の半分が其の「睡りの時」であることは本當に恵まれてゐると思ひます。

▽金の無いことも、病身なことも、不運なことも、餘り苦に病むことはいらぬ、人生半分はその苦も忘れて通れるから。▽而し「忘れ、るから」といふてそれが絶対の慰めではありません、何故かといふと一度覺めるとアノ騒ぎですから、いや金が欲しいの、道具が多いの、器量が好いの、頭が良いの、蜂の巢をツツイタやうな騒動です。

▽宗教の解脱はハツキリと醒めた上で、有るを誇らず、無いのを愚痴す、隨處隨時に**最善最力を盡して生きてゆけること**であります。(尅)

□町に挿花會でもあるのでせう、それへ生花に行く青年達に田舎道で逢ひました。

□皆な自轉車で、尻へ花器と花とを結び付け、巻煙草を吹かし乍ら、大聲に談笑し乍ら走り抜けて行きました。私はそれを見送つた時淋しい感じがしました。

□あれであの青年達は、會場へ着くなり、あの花臺、あの花器へ、あの花を生けらる、だつたらうが、それで自分乍ら見事だと思へるやうな花が挿せるだらうか、器用な上手な花は立つか知らぬが、自分乍ら尊敬せられる活きた花が立つだらうか。

□僅かに三尺にも足らぬ花だといふが、その三尺にも足らぬ花に全自己を盛り、天地人三下がる花でなければ死花であります。

□花を生かすのには花を生き者として取扱はねばなりません、生きた人格として取扱へた時に、生きた自分と生きてゐる宇宙とを、その花に因つて現はすことが出来ます。それを知らずして、花を扱て死物にしてゐる時、如來さまの世界を殺し、自分を殺してゐる譯であります。

□これは單なる花の問題でもなく、又一片の藝術觀でもありません、直ちに宗教の活問題であります。私達は如來さまを信じてゐるといふが、眞に生きた如來さまを信じてゐるでせうか。もし生きた如來さまにお値ひして居らぬのなら、その信仰は死んで居り、自分も死んでゐる譯であります。

□如來さまの生きた御姿とは、悉くの上に生きてみえる御姿——宇宙心を見出し、その現はれてみえる一々の御人格に「一心に敬禮して」ゆけるのでなく成りませぬ。

□信とは敬、敬とは愛、愛とは誠、誠とは**全力を盡してゆくこと**であります。(尅子)

# 盲の阿那律

土屋 觀道

一、  
或る日のこと、釋尊を中心として、信仰の告白が述べられた。其の中に一人の盲目の佛弟子があつた。彼は熱心に他の佛弟子の告白を聞いてゐたが、何と思つたか自分も一つの告白を爲すべく立つた。  
「諸君、私にも一つのこと、に告白がしたい事件があります」と。多くの佛弟子は盲目のくせに何を言ふのかどあなごつた者さへあつた。それは彼の姿が盲目の上に其のなりが甚だあがらぬものがあつたからである。乍然そこになると眼の見ゆぬ彼は平氣であつた。

そして彼の態度は眞劍であつた。暫くは感激にみたされてか言ふべき言葉も涙の爲めに言へないやうな有様であつた。

「諸君よ、私は誠に不肖の身であります。だから私如きものには或は諸君の前で自ら自分の信仰を告白することは全く當を得ないことかも知れません。

乍然それでも私にとつては此の上もない私の喜びであり、命にも代へがたい感謝でありますから、暫くそのことを言はして下さい。私は何といふ愚なものか過去無量劫に於て、生々世々此の通りの盲目であります。然るにそれは私が嘗て世尊のもとに修行中、いつも説法を聞きながらも常に眠るのがくせであります。

二、  
全くそれは私への業病でもありませんか、いつも世尊の御説法が始まると私の眠りも又始まるのでした。そして又世尊の御説法が止ると私の居眠も亦止まるのでした。私は全力をつくして此の居眠を止めやうとしましたが、私の力ではどうしても止むることができませんでした。

然るに或日のこと、私は一つの恐ろしい言葉を聞きました。それは「阿那律よ、どうしてそんなに眠るのか」と。御言葉はただそれだけでありました。乍然此の時以來この私は世尊のこの御言葉が私の身にしてみても、全く眠ることができなくなりました。

それからと云ふものはどうしたものか、今度は前と反對に、どうしても眠ることができなくなつてしまつたのです。夜も晝も、晝夜を分かず私は全く不眠の人となりました。思へば私は全く眠ることができなくなつて、その爲めに私に私の眼は全く破れてしまつたのであります。

其の後、生々世々、私が常にメクラとして生れて來るのはそれからであります。乍然諸君よ、私はその爲めに始めて世尊の説法を眠らずして聞くことができるやうになつたのです。そして、今や此の肉眼はつぶれてしまいましたけれども、其の代りに私の心眼はかうして宇宙の法界を見てまつることができるやうになりました。」

「世尊よ。肉眼つぶれて心眼を開くとはこのことでありませうか。今や私は不死の世界を見、眞生の世界を拜し、心に御佛を拜むやうになりました。之は偏へに世尊のまたなき御誘きによるからであります。私の衷心から感謝に堪えないどころであります」と。

之を聞いた多くの佛弟子は其の阿那律が眞實の心に誰一人動かされないものはなかつたと云ふことである。

私もそれからと云ふものは急に盲の人がなつかしくてならなくなつた。そして、以前には目の見えない盲の人を見るとたゞ不自由だらうどの同情の心に過ぎなかつたものが、それからと云ふものは寧ろ尊くさへ思へるやうになつた。私たちは肉眼のつぶれた人を哀れむよりも、先づ自分たちの心眼の未だ開かないのを恥づべきではないか。そして、肉眼のつぶれるほど道を求むるに眞劍であつた阿那律の尊さをこそ崇むべきではなかつたか。

私はかう思ふとき、阿那律が肉眼のつぶれたのを悲しまず、心眼の開けたのを涙を流して喜んだのを亦無理からぬことだと思ふ。そしてまた、阿那律の一生を思いやり乍ら、併せて多くの同胞を眺め來るとき、多くの人々の上に於て、阿那律に及ばぬことの甚だ多いことを一層に感ぜざるを得ないものがある。而て此の点から見ると、阿那律の盲目はむしろ衷心から喜ぶべく、之に反して我が多くの同胞はむしろ衷心から悲しむべき地位にあると云はねばならぬ。雨が降つても、風が吹いても、其の天然の恵みも知らず、朝の景色も夕の姿も其の心なき人々には何等の風光も見えないのは未だ心眼が開かないからである。

それに比べて、阿那律は實に永生の光を見てゐる。而て人生の幸福を如來を中心として眞生の上に正しく發見してゐると云はねばならぬ。同じ盲目でも阿那律の盲目は幸福であつた。それはよし肉眼はつぶれても、之に代るに其の心眼を開いたからである。それに比ぶれば如何に肉眼は開いても未だ心眼の開かずばそれは決して眞實の幸福ではあり得ない。否、今日の多くの人々は肉眼あるが爲めに反つて眞實の心眼が開くことができないのではないか。それは肉眼あるが爲めに目前の現象に捕はれて、永生の

光を見ることができないからである。されば目あきの人々は盲の人に比べて更に一層の用心を要するものがないではないか。否、少くとも道を求める爲めに夜も日も眠れず、遂に失明するに至つた阿那律の求道心に比べて、未だ眼もつむれないほどに求道の心も熱心でない私の心は阿那律に恥づべきものがないであらうか。私はかうした考へで、阿那律の一生を思ふとき、うた、私共をして眞に激勵して止まぬもの、甚だ多いのを感じずには居られない。

## 四、

心眼を開くとは即ち永生の光を見ることである。永生の光を見るとは即ち眞生の道に生きることである。如來に南無し、如來に歸命して、本心のまゝに生くることが即ち永生に生きた姿である。佛は肉眼を以て見るべきものでなく、どこまでもそれは心眼を以て見るべきものである。如來に南無し、合掌し、自己の本心に生きることが即ち永生の光を見たことである。

だから、肉慾の眼はよしつぶることも、否、むしろこの肉慾の眼つぶれてこそ、眞の心眼は開かれて來るのである。肉慾我慾の眼がいかに働いても、到底眞實の眼は開かない。従て、私達は肉眼の達者なるを以て自ら誇るべきものではない、否、若しそれを以て誇る位なら、私達に勝る幾多の動物のあることを知らねばならぬ。茲に於て、私たちは今や肉眼の働きを止めて、更に一步如來の光に信仰の眼を開く可きである。

此の意味に於て私は常に阿那律の心眼をいとも尊い教へとして、自分の心底に銘して止まぬものがある。そしてまた、彼の失明こそは更に一層の私への光である。何となれば彼の失明は單なる彼の惡業から來たところの報いてはなくして、道を求むるに急にして、むしろ其の精進の結果を示すものである。

かう思つて見れば、凡そ此の世の中に、自ら道を求めて不眠不休にして、自ら失明に至までの熱心の者が幾人あるであらうか。此世に目あきの人は甚だ多い、が心眼の開いた人は甚だ少い。そしてまた、此の世に失明の人も甚だ多いが、自ら道を求めて、失明した人に至つては殆んど無い。して見れば私が阿那律の失明を以つて、信仰の光とするのはあながちに間違つた事ではあるまい。

之を以て、之を見れば世の目あきの人々は此の阿那律の失明を眺めて何と見るべきか、そこには少々自らに恥づべきものがあるではないか。そして又、失明の人必ずしもさまで眼あきの人に比べて、必しも悲しむべきものでもないかも知れぬ。それは已に阿那律に於て、其の幸福を私共に示してゐるからである。(三、一、二七稿—三、三、一追稿)

## 二月の出来ごと

土 屋 観 道

### 一、男子出生

今年の二月は私にとつては近年にない大きな出来ごとでありました。其の中の一は男の子が生れたことです。子供のない方々には子供を持つた味いがない爲めに、其の嬉しさも悲しさも語るによしもないことですが、一人でも子を持つた経験のある方々には其のことがよく御判になつて頂くと

思ひます。それも初めての時には女の子でも仕方がないのですが二人も三人も女の子ばかりとなると一寸氣落ちのするものです。かういへば女の子と男の子との間に差別待遇でもするやうに思はれても困りますが、それはともかく、まだ私共日本人としては先づ第一に男の子が生れてくるといふことは女の子の生れてくるよりも多く歓迎せられ

るやうです。それも最初の子供はまだ初めての子として先づ無事でさへあれば小ごとも云へず嬉しものです。二人目となると何だか女の子ではあまり喜ばれぬ感じがします。尤も生れた子そのものに對して、ないことはもとよりですが、できるものなら、「男の子が欲しいなあ」といふことはお互に口でこそ云はぬ、心の内では願つてゐるところであります。

私の方でも初めて子供が生まれましたときは女の子でしたが、それでも先づ無事でよかつたと云ふ感じと、周囲の人が一姫二太郎などと云ふものから、まあそれでもよいとして、二度目の時には前にも云つた關係上、今度はきつと二太郎かなと思ひもし、願はれても居りましたのに、又しても女の子が生れて来たので、その時はやはり口でこそ「まあそれでも無事でよかつた、女の子でもこれもまた如來の下さるまゝだから」とは云つたものゝ、それでも「これが男であつたなら」と思ひもし、又あとになつて口にしたことも一度や二度ではありませんでした。

然に其後、時たれて子供がないので、もう私共には子供ができないのではないかとさへ思へたとさ、たま／＼宿つて来たのが今度の子供でありましたので、「今度こそは男の子だよ」又「男の子でない位ならもう子供はいらぬ」など、戯談ではありながらも、その中に幾分の本氣がありました。それでも、私の心の中には打明けて申すことも、一度も二度も女の子ばかりだもの、或は今度も亦女の子かも知れないぞ、一姫二太郎などとたまさか経験もあり、あまりに楽しみにした先きの失敗もあることゝして、今度は二度目の時ほどに「男の子であれ」と望む心も強く起し得ませんでした。今から思ふと反つてそれだけ、男の子を望んでゐたと云ふ印にもそれがなるのですが、意識的にはあまりにそれが働いてゐるのを感じませんでした。乍然、若し無意識的と云ふならば「男の子であつて欲しい」と云ふことは家内も私も等しく念願し、又言にしたことは實に一通りではありませんでした。殊にもう二人きりで子供はないのかも知れぬと思ふと、それでは自分たちには女の子二人きり

か知ら、今一人位あつてもよいが、それにしては「男の子がほしいなあ」と語り合つたときさへ度々である位でしたので、愈々子供が宿つたと知つたときに、私共が「男の子であれ」と願ふのは無理からぬこと、思います。でも自分の願いが將してまゝになるかどうかは第二子の時に於て已にそれがならぬことを知つてゐる私たちには半ば絶望的にそれが迎えられると云ふことも亦事實です。

それでも臨月のひと月は産婦の爲めに何にかと養生の爲め各地の傳道も差控ゆることにしておきました。そして、其の前月即ち去る一月になりますと、さすがに愈「來月は子供が生れるのだが」と思ふとき、念佛の中に男の子のやうな氣がするのです。そして、その名を何とつけやうかと思ふとき、どこにもなく「春光」と云ふ名が私の心に浮んで來ました。「ハルミツ」とよぶのです。「春光うら、かなり」と云ふ意味です。春の日のうらかな光のやうに、自分の子にもあれと云ふ、子を持つてゐる親の心の反影でありませうか。私は家内

にも右のことを申したことであります。「女の子でしたら」とのことに女の子ならばそのときでよい女の子などはもう美智子と良子でたくさんだと笑いました。でも若しそんなこと云つて「女の子だつたら」さう産婦が落膽することだらうと思へば、それでも落膽はお互いさまたとは思ふもの、その爲に産婦の肥立を悪くすることは忍びないことだと思つて「女の子でも仕方がないさ、いづれ自分たちで勝手に造つたものではなし、すべて如來の賜であるから」と申したことであります。然に愈々産れて見ればそれが「男の子」であつたのでした。私共の喜びが此の子の爲めにいかばかりであつたかはどうてい筆紙のつくすところではありません。丁度子供が生れる間には私は産室にはいつて來たのでした、そして男の子だと思出したのは私が最初でした。家内は私のこの聲を聞いて、私の手をとつて嬉し泣きに泣きました。私も妻の手をとつて、確と握つて喜べと云いました。でもあまりに喜び過ぎてどうかと思つて、氣を落つけねばならないと注意しました。一家の

中が「男の子」「男の子」とはしやぎ出しました。

それからと云ふものは私の一家は九で夜のあけたやうな明るい氣分で、喜びの光に充ち満たされました。私の心はどうしたのか、何となう明るくてくならないのです。別に之と云ふ喜びを殊更に感ずるのではありませんけれども、何となく、いつしか喜びの姿に變つて仕もうのでした。口にくそ云はね、産婦の喜びは又一層に私以上であつたかに見えました。

「男の子を持つた兩親の喜び」を今私共は味つております。そして、さうしてかうも嬉しいものかと妻と二人で語り合ふときさへ度々であります。でもかうした私共の喜びは決して私共二人の喜びではありません。そこには必ず「男の子を持つた兩親の喜び」が此の世の凡てのさうした人にもあるものでありませう。そして私共は今その喜びをそれ等の人と同じく喜ばさして頂いてゐるのであります。之を以て之を見ますとき、私共は此の喜びを以つてたゞ私共二人の喜びとせず、所謂万人の親の喜びとして、如來より教へられ、等しく如來

のこの尊き御惠を感謝すると共に、又多くの子を持つてゐる兩親の「子を思ふその心の尊さ」を今更のやうに感せずにはゐられません。そして、また、私の家内が其の子の爲めに、夜もろくく眠れないほどに心をつかう有様を見て「子を持つてゐる母親の心」を尊敬せずにはゐられなくなりました。序で乍ら、子供の名前ですが、春光と云ふ名はよいやうですが、愈生れて見れば春光では少々その名がやさしすぎるやうでなりません、春光うら、かなりでは今後の社會ではお人よしになりすぎはしないか、それに較ればむしろ「秋光」とこそ望ましいどころであります。春に生れた子供に「秋光」もいかどかと思はれて、何にか別に「よき名」をと思ひわづらいました。末、愈七夜にもなりましたので、さうく色々考へたあげくに「さしのほる旭の日影のさかにて、法の光の道とこそなれ」と云ふ意味から「光道」と名づけました。如來の光と私の名の觀道と云ふ道の字を取つたことにもなります。何にも知らぬ子供の心にも、後で此の私の心を知つてくれる時がありましたなら

ば、親の心をつぐ人として、慈光のもとに眞生の道を涉つてくれることでありませう。露の身のとうしたはづみで私より早く消えんとも限らぬこの幼児ではありますが、かうした望みをかくる親の願ひも人としてまた止むを得ぬものであります。そしてまた之も亦新に私共の心の中に植ゑつけられました一つの新しい経験の一つでありました。

## 二、椎尾博士の立候補に對しての

### 推薦演説

次に起つた一つの事件は今度の普選に於ける椎尾博士の立候補に對する私の推薦演説であります。普選に對する私の考へはかねてから持つて居りましたが、未だ之を公には發表したことがありませんでした。然に今度は愈其の時が来たと思つて、椎尾博士の應援演説に出かけねばならぬはめになつたのです。博士は名古屋の出生であり、又名古屋の建中寺の住職であり、其の他名古屋は博士の立候地として、最も有利な適任地にあるので若し博士が立候補せらるゝとするならば名古屋市こそ最も先生に於て適當の場所と云ふべきであり

ませう。私が博士の爲めに應援に出たと云ふことは私としては少しでもそれが博士の爲めになることであつたなら、此上もない嬉しいことでありました。それは博士は我が宗門の先覺であるばかりでなく、又私共の先生であり、そして、先生的人格と其の識見とは確に一國の代議士として世にはづかしからぬ適任者であると思つたからであります。

そればかりでなく、近頃の私は凡人人間としての一生は現實をして少しでも眞實の世界に改造し理想の生活を此の上に實現せしむると云ふことが眞生主義の最も大切なものであると云ふ点に於て博士の共生主義と非常に一致するものが多いからでありました。而も博士の大勢甚だ不利であつて當選のほどが危いとの報に接したときじつとして居られなくなつたからであります。

今度の普選では中立として當選した人は全國で十五名にしか過ぎません。之は主として國民の政治思想が發達した結果として各人が各自政見の是非によつて其の人を投票することになつて、所謂

あいまい極まる中立者を許さぬことになつて來たからによるのでありませう。

乍然今日の政黨政治に於て、私共は其の何れに組すべきかと申しますならば理論としては全國國民の幸福を中心とする民衆政治によるべきはもとよりであります。其の實、何れが眞に民衆政治を事實に表現してゐるかを顧みるとき、今日の既成政黨に於ては悲しい哉私共は之を見出すことができないのであります。私は其の普政友會が所謂藩閥政治に對抗してあくまで民衆政治を標ぼうして立つてゐた頃には衷心から之を愛したものでありましたが、其後彼等が絶對多數を得るに至りまして憲政會と對立するに至り、黨利中心の政策は國家全体の幸福を無視するに至つて、全く之に好意を持つことができなくなつた一人であります。殊に私はそれを最近の彼等の態度に見てそのことの甚しいのに驚かざるを得ないものがあります。之比すれば今日の民政黨にはまだ私の心はそれにひかされるもの、甚だ多いのを感じます。此の点から或る人は私を目して民政びいさだを申しますが

其の實必しも民政黨に限るものではないのであります。謂換へれば私の今日ほどでも既成政黨に入るほどに今日の政黨に信頼を持つことができぬのであります。

乍然、私も一日本の國民として既に國を思い、社會を思ふ一念に至つてはあわて後人に譲らぬ覺悟であります。而て、既に普選によつて私にも已に一標の選舉權を得ました以上、さて之を如何に使用するかと云ふ点につきましては、之を具體的に考へざるを得ないものがありました。

茲に於て、今日の政黨政治は今以て私共の衷心から感心すべきものではないとしても、今のところ之に代はるべきよい方法がない限り、少くとも之によつて比較的よりよき方に之を行ふより外に仕やうのないものかと考へます。従つて、目下のところ之を如何に改良して行くべきか、それは少くとも、今後の政黨を淨化して行くこと云ふことが最も大切である。それに就ては全國が一となつて共に向上し發展して行くこと云ふ全一主義の政綱でなくてはならない。乍然それだけならば已に多く

の既成政黨の中、一として此の全一の生活を標ぼうしない政黨とではない。けれども、其の實際に於て將して其の幾人が眞に國民全体の幸福を中心として之に動き、之に立つて居るものがあるか。其の事實に就て之を見ますれば、今日の既成政黨の多くは、皆自らの黨利黨派の爲めに左右せられて、眞に其の國民の全体を思ふものは至つて少いのであります。茲に於て、私共は此のことたる主として、眞實の人生に目さめたる信念の人でなくてはならぬと思ふのであります。

此の意味に於て、政黨政治のもとに、最も大切なのは此の政綱のもとに立つところの人格の人、即ち所謂信念の人でなくてはならぬと思ふのであります。従て本來政治に於ては政黨政治を尊重すべきはもとよりであります。そこには此の確固たる政綱信念の人を求めて止まぬものであります。何となれば前にも申したやうに、此の信念の無い人は既に政綱には明に政黨政策を明にして居りましても、それはたゞ一時の民衆の歡心を得る爲めの具に過ぎずして、一身の利益や名譽の爲めなら

ば其の政策を行はないばかりか、全く之に反した行爲を敢てし、又まさかの場合には政黨のくらはなごすること甚だ多いからであります。

まして此のことは就中、中立議員に一層多いことは今までも其の例の多いことでもあります。恐くは今度の普選で當選した人々にも或はかうした人々が多くはないかと思はれてならぬのであります。乍然之からの社會は今後か、る灰色議員や不逞の代議士は決して二度と投票することのないやうにしたいものです。否今後私共は主としてか、る非立憲的代議士は悉く此の社會から放逐せなければならぬと思ふのであります。

乍然、椎尾先生の中立は決してか、る一般の灰色中立ではないのであります。即ちそこには自ら一つの政見あり、政策があるのであります。従つて一人一黨主義でもなければ又既成政黨に是非とも入らねばならぬものでもなく、全く自己の政見政策の上に立つて行かれるので、所謂單なる中立派ではなかつたのであります。従て、既成政黨の或るもの、如く、どこまでも反對せんが爲めの

反對でもなく、いやしくも自分の政見と一致するものならば其の黨の如何を問はず、眞に之を一致していけいして、あくまで全國民の幸福を中心とした政策に進むのが先生の所謂立場であつたのであります。それには初めから、自己の政見と政策とを明に立て、ゐられます。而もそれが私共の心と一致するものであります。

私はかうした意味で先生の爲めに推薦の勞をとらして頂きました。そしてまた、名古屋に於ける私共の道友も皆悉く此の意味で此の道の爲め社會の爲めに應援の勞をとられたのであります。私も女もそれこそ寢食も忘れての應援でした。男十七、八、九の三日間に渡る前後九回の應援演説にすぎませんでした。道友何百の同士は其の間十數日に渡り、實に日夜を通じての此應援でありましたことは、我が眞生同盟の上の一つの限りなき力の試練であつたこと、思はれます。

(二、二八)



念佛冥想

(黒平寺にて)

常生

長閑けき春よ  
我が心は其儘聲に  
空中高く  
彌々高く彌々闊く  
廣き宇宙よ  
我が躰は宇宙に満つ  
法界に遍し  
聲が我が我が聲か  
妙へなる響よ  
妙へなる音よ  
下界へ深く  
彌々深く微妙に流る  
我は南無す  
み前に端座して  
雲雀は歌ふ  
雲間に翔りて

(舊稿)

# 私の精進

鷺津 太一

因縁は實になんとも形容出来ない。厭だ嫌ひだと避けやうとしてもいつか、確かり本心と信仰のお話とが結び付けられた時、何故初めはあんなに厭がつたのだらう、何故めのお話が分らなかつたのだらうと今になつてみれば不思議だ。それから一度より二度、二度より三度とお話に味が出て来た。だがやがて恐ろしい倦怠の時期が訪れた。嬉れしさ一パイで山へ駆けづり登る者は早く疲れてしまふやうに。しかも信仰は、非常に高い大きい山であつた。山が大きければ大きいだけ、最初の登りは、大小の峠を越へ初めて登り一筋の登山口へ達するのではなかつたか。山に登る者は頂上をのみ凝視すればきつとあまりの高さに疲を益す。下方を見るのだつた。と云つて一日や二日信仰を始めてくれだけ山へ登つた氣であるのか。長い間に確かり縛られて来た、偽悪愧の因襲の繩は、生優しい念佛をしてゐて、どれだけ断ち切れつ、あるのか。過去を見なければならぬ、過去とだけだけ自分は偽悪愧の生活を経て来たかと。

次に一体私はお上人から法話をお聞きする毎に、その内ざれば本心の耳に、は入るだらう。耳にはきつと、は入る、が本心へ確かに銘せられるのはどれだけか。本心に聞いたのならその全部

は、佛子の自覺となり、手に足に瞳に口に、體驗されなくつてはならないが、お話の次ぎの行ひは果してどうであらうか。成程そうだつた！と感じはした。だが、そのお話から家に戻つて、清い念佛の同志の空氣から離れて、自分の因襲と周囲の誘惑の中に平然と對抗し、素直に改め行ひ得るやうな私ではなかつた。その時こそ私はどうしたか。眞實の如來の光明に合掌の生活が歩調を速めるのだつた。又そうするより他に道がなかつたではないか。お話を私の念佛と生活とは信仰の山に登る、強力と金剛杖と自分の体の三つ、どの一つ欠けても登山は駄目だつた。しかし空氣も水も衣服も一切は豊富に、山へ登るが爲めに！興へられてゐるのではなかつたか。その空氣を充分に呼吸し、水で喉を濕し、衣服を身につけ、山を目ざす者は、何んと感謝しやうか。だがその登山者の中にも、休み勝ちな人、疲れの早く出る人、急ぐ人、悠くりかまへてゐる人等、さあ、私はどの種類に屬するのだらうか。認め得ない程の速さで進む時計の針は、氣づかない内に、五分十分と又一日は瞬間に消え、巡ぐつてゐる、あの落ちつきであの速さで進む登山家でありたい。それにしては何んとふしたら、毎日の自分だらうか。何んと不確實な、精進の歩みだらうか！

(をばり)

# 吾朋便り

大垣 淺野寅次郎様より

此度は奥様には御男子御出産御母子共御肥立よくましく候由承り家内一同御喜申上げ居候、早速御祝申上げ度存候處丁度生憎當佛教座談會の會場問題にて茲四五日間名古屋へ来るやう、毎日飛び廻り居り寸暇を得ず心ならずも延引申譯無御座候、本日大体目鼻相付きどうやら半永久的の結構なる會場を得る事に決しほつと一息仕候、それは扱置き上人様の御喜び如何計りかとお察し申上候、岐阜にて過日御伴致し候節此度女子ならば名前も付けぬこの御言葉、御誠言は存しながら自分の過去に照しみて實に御尤も思ひ居りしに此吉報に接し我事の様に思はれ御同慶に奉存候、奥様にも一つ重荷を下されし御心地存候

▼名古屋 鷺津太七様より

御滞在中、あの場合何の御待遇も致さなんだ事を一同慚愧してゐます。乍序権尾先生の選舉、開票當日吾々一同が胸をおどらせました事は、當日午後四時頃権尾先生の得票が順位第五、六位を上下して居りました事でありました(朝の間は第七、八位の事もありました)

同はこれでは先生はとてためかど實に心配しておました處が如仰、如來様の御加護か天の其人を得せしめ給ふたのか、幸ひにも決勝点にて第五位ではあります。が當選せられました、同人一同が飛び立つて喜び合ひました。幸ひ其日は御承知の通り中野上人が崇徳寺へ御出の日で幹部連も同時に崇徳寺にお集りでしたから、小生は宅に居りましたが早速崇徳寺へ馳付けまして(崇徳寺様黒宮様百々様遊谷様小生)都合五人自動車で本部の建中寺へ御祝ひに参りました。本部では今や當選の確定で堂中大歡聲、御祝酒やら胴上げやら萬歳くで大賑ひ、新聞社が寫眞を撮りに来るやららみらひ大さわぎで涙の出る程嬉しう御座いました。

本部の幹部の方々よりも豊下へ宜しく申して呉れと仰せられました、殊に梅香院様か一と入今度土屋上人の御來援が願へたので將來の爲め何かと非常に嬉しいと仰せでありました梅香院様の心からな嬉びの色を拜見して小生は御上人の御多忙中御繰合せられて御來援下さいました事を深く感謝致します、是れも如來様の御援である存じます、今後共一層當市の爲めに御指導下さいませ。

▼越後柏崎 渡邊八右工門様より  
 昨年より發願して居りました眞生會の婦人部に設けたい希望ありましたので、先般來皆様に御計り申しました處一同御賛成下さいまして、來月上八様御來柏の日眞光寺にて發會式を舉行致し度心組であります、尤も只人數のみの多きを望まず眞生主義の共鳴者の輿論方及家族方を主とした集りとして、毎月一回づゝ例會を繼續致したい決心であります、何卒御指導を賜らん事懇願致します。

當地も漸次眞生主義に共鳴者が増しまして毎回毎に入會者があります、之れに付ても自己の信仰の未熟なる事に痛感致しますが、只自己の全分を盡す外無きと深く反省して居ります。別紙石黒氏の書簡の如く柏崎銀行内青年行員によりて俱樂部が出来まして(八名)去る二十三日夜眞光寺にて第一回修養會を開きました、二時間ぶつ通しの念佛なるに皆様一心にお念佛なさる姿を拜し、實に涙ぐましい程尊く感じました、之れよりあらちらに斯様な會が設立されようぞ存じます、吾等も自己の信仰増進を圖るに共に力のあらん限り社會的に活動せん事を期して居ります。  
 ▼(其の石黒氏の手紙)

□東京 土屋觀道

正月が來たかと思ひましたのに、もふ二月もはやすぎて三月となりました。春の光も全國を通じて行き渡つたやうです。道友の方々にも御變りは在りませんか。私共にも其後至つて無事、去る二月の二日には男子の兒が産れまして、それこそ私の一家では上を下への大喜びでございました。名を光道とつけました。肥立もよい方ですから、御安神下さい。一般に早く御知らせしたくも思ひましたか、反て御心配をかけてはと差ひかへた点もありますから、其の邊のどころは御察しのほどを願上します。次に我が道友の發展は今春にかけて、更に一層の盛況を見せてまゐりました。つきましては此の際更に一層の馬力をかけて、慈光中

謹啓 過日は種々御迷惑相掛けまして御禮の申上げ様も無く一同感謝して止まない次第であります。此度の修養會は最初の試みでありクラブとしては從來の殻を破つたものでした。乍併結果は豫期以上の成績を収めましたので喜ばしく存じてゐます。クラブの修養方面に一新生期を示したものが様に思ひます。

私は入會して頂きまして當時既に今日あるを深く期したのでした。それはクラブの修養中心を此の眞生同盟の中に見出したものご念願して居ました。併し異中に同を見出し之を統一する事の至難な事は古來聖賢の教ふる處でありすが眞生運動の偉大なる靈化は遂にクラブ全員を潤すこと云ふ盛大さを見るに至りました。過去に於ける理想は刻々に現實の實在を變えつつあるを感じます。斯うした時に眞に御上人の御徳と眞生主義の大なる力を見、且如實に知るのであります。唯物思想に幻惑を感じ又は夫れに魅せられつゝある混濁した現代の思想界にさり此の眞生主義はこれが歸趣を示すものであり改革の一大中心をなすものであると信じます。

心の活躍を試み度存じます。從て會員一同の方々も此の際思ひ切つて發展運動に御盡力のほどを願ひます。私も今年こそはと大いに活動すべく覺悟いたして居ります。

殊に面白く、且又非常に力強く思ひますのは横濱の内海健郎氏や東京の神谷善之進氏が、手を提げて各地に自由傳道を試みやうとして居られることです。そして又清水の中村辨康師や津島の中野善英師も今年こそは私共の日頃の願ひのやうに各地の傳道に出演を願へることになつたことです。何事でも大きな事業は決して一人の手ではできません。必ず多くの人の力によらなければならぬものでありますから此際一層の御努力を願ひます。  
 (三月一日)

思想的に岐路に立つ私達がこの眞生主義の洗禮を受けつゝある現在をかへり見る時惠まられたるもの、幸福を深く謝すのであります。是れ皆御貴下御一統の平常の御熱心なる御教導の賜と感慨轉々胸に迫るものがあるものであります。

改めて御禮に參上す可き處であります。が先禮をかへり見す手紙中を以つて厚く御禮申上ぐる次第であります。猶御恩愛に甘へ今後宜しく御指導の程重て御願ひ致します。  
 二月廿六日 石黒武夫

渡邊様

▼神戸市 鶴田昌造様より美和子へ  
 御玉葉難有拜受御厚禮申上候、愈々御機嫌麗敷在らせられ御慶申上候、久し振に上人様御指導のお別時を惠まれ雨中又寒中にも不拘意外の盛會を告げ申候は全く上人様の御徳の然らしむる處と奉感謝候、皆様も大喜びにて三日間だけでは惜しいと申居候、既に御歸館御話有之し事と状況此所には省き候へ共深き感謝の念に充てる一同の様子御諒察被遊度候、母は此度は留守居仕候其お蔭にて店の者も家内も連日隨喜仕候次第御喜び被成下度候、先は右御禮申上候、合掌敬具。

●觀道旅行日程

- 三月八日 清水(未定)
- 同 九日 焼津光心寺
- 同 十日 三河舉母町(豫定)
- 同 十一、二日 大垣及岐阜
- 同 十三、四、五日 未定
- 同 十六、七日 大阪
- 同 十八日 尼ヶ崎圓平寺
- 同 十九日 神戸
- 同 二十、二十一日 名古屋崇徳寺
- 同 二十二日 東濃歌知町
- 同 二十三日 道中
- 同 二十四日ヨリ二十八日迄 越後柏崎
- 同 二十九日ヨリ三十一日迄 同刈羽郡南鯖石村
- 四月一日 同見附、三條、長岡方面
- 四月十一日ヨリ十七日迄 岐阜縣城山行基寺
- 七日間

# 行基寺別時三昧會案内

日時 四月十一日ヨリ十七日マデ 七日間

前日までに御登山のこと

所 岐阜縣海津郡城山村 行基寺

養老線山崎驛下車十五丁

導師 土屋觀道師

行基寺の念佛三昧會が眞生道友三大別時の一である事に場所が遠く人里を離れた仙境にも云ふべく殊に櫻花爛漫の候である事は今更吹聴の要を認めません、深く念佛三昧境に入る絶好の妙地である事も既に世間定評のある所です、願はくば道友皆様の御來會を期待して止みません。

## 行基寺

### 眞生誌料未納の方へ

誌代未納の方は此の際至急御拂込み下さい。目下會計の方でもその爲めに全く困つて居りますから

東京眞生社

一味パンフレット

第一編

中野尅子述

正しい信仰

一部十錢  
送料二錢  
十部八十錢

(光明禮拜儀解説)

愛知縣津島町 一味會

振替名古屋一六〇二三番

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋觀道

發行人

名古屋市芝區芝公園第十四號地九番

印刷所 横井印刷所

名古屋市東區關鐵治町四ノ八

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日) 昭和三年三月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第七卷 第三號  
第三種郵便物認可) 昭和三年三月十二日發行